

インテリアを目指す学生に対する教育効果の定量的確認の研究

— 平成 15 年度から 19 年度までの結果及び分析 —

A Case Study of Educational Effect upon Kyohei Junior College Interior Design Course Students: Results and Analysis in 2003 - 2007

新 井 竜 治

Ryuji ARAI

要約

平成 15 年度から 19 年度にかけて本学住居学科に在籍してインテリアの学びを志した学生に対する、インテリア関連の資格取得支援によって、多くの学生が在学中に希望する各種公的民間資格を取得することができた。特にこの間、インテリアコーディネーター資格試験という超難関の資格試験に合格して、在学中に学生インテリアコーディネーターになって卒業した学生を 5 名輩出できたことは大きな成果であった。そこには、学生本人の明確なモチベーション、信頼度が高く効率的なカリキュラム、一人一人に向かい合う指導姿勢が存在していた。しかしながら、難度の高い資格を取得できずに卒業した学生も大勢いたことも事実である。そこには、学生本人が培ってきた基礎学力の差という問題があった。この基礎学力は高校時代までに培うべきものであるが、昨今は入学時の学力不足問題もあることから、短大教育における専門教育と共に、幅広い基礎教養教育も重要である。

キーワード：資格試験、インテリアコーディネーター、色彩検定、リビングスタイリスト、照明コンサルタント

目次

I はじめに

- 1 研究目的
- 2 先行研究と本研究の位置づけ及び本研究の学術的特色
- 3 研究調査対象・期間
- 4 研究方法

II 住居学科における資格取得支援の位置付け

- 1 在学中の公的民間資格取得の意義について
- 2 在学中に受験を希望する資格試験に関するアンケート調査結果

III インテリアコーディネーター資格試験

- 1 インテリアコーディネーター資格試験の概要
- 2 インテリアコーディネーター資格試験への取組みの概要
- 3 インテリアコーディネーター資格試験の結果及び評価

IV その他の資格試験

- 1 色彩検定への取組みと結果及び評価
- 2 リビングスタイリスト資格試験への取組みと結果及び評価
- 3 照明コンサルタント資格への取組みと結果及び評価

V インテリア関連の資格取得支援を伴う教育方法のガイドライン

VI おわりに

I はじめに

1 研究目的

本研究の目的は、インテリアに関する学びを志して本学住居学科に入学した学生に対して施した、在学中の資格取得支援が、当該学生にどのような教育的効果を及ぼしたのかを定量的に確認することである。

本学住居学科は、短大に設置されている住居学科としては日本で唯一の学科であり、卒業と同時に、二年間で2級建築士受験資格が与えられることが特徴である。しかし昨今の大学生、特に短大生は、就職活動の際に有利な資格を在学中に取得したいという志向が極めて高い。そこで本学住居学科では、このような学生の多様なニーズに応えるべく、在学中に各種の公的民間資格が取得できるように配慮されたカリキュラムを提供してきた。本学住居学科の具体的なカリキュラム構成は、2級建築士受験資格取得を軸として、インテリアデザイン、建築デザイン、福祉住環境デザインの3つの分野に細分化されている。そして各分野の公的民間資格を在学中に取得できるように、正規のカリキュラムの他に様々

な資格取得支援体制を確立して実施してきた。また近年、インテリア分野の学びを志向する学生の割合が増加しており、折しも平成15年度からインテリアコーディネーター資格試験の受験年齢制限が撤廃されたので、本学住居学科においても在学中にインテリアコーディネーター資格を取得することを奨励すると共に、様々な対策を講じてきた。その結果、本学住居学科においては、平成15年度から19年度までの5年間に、在学中に二次試験まで突破して学生インテリアコーディネーターになった者が5名誕生した。また一次試験1科目の合格者の累計は5年間で29名に達した。その他、色彩検定、リビングスタイリスト資格、照明コンサルタント資格などのインテリア関連の資格試験があり、これらの資格試験にも年齢制限がないため、本学住居学科の学生は在学中にこれらを受験して資格を取得することが可能である。そして実際にこれらの資格を有して卒業する学生が増えている。

よって本研究では、インテリアコーディネーター資格試験をはじめ、色彩検定、リビングスタイリスト資格試験、照明コンサルタント資格講座に挑戦した学生の5年間（平成15～19年度）の定量的データを基に、本学住居学科が提供した資格取得支援が、彼らにどのような教育的効果を及ぼしたのかを確認する。合わせて、この5年間の取り組みの結果から明らかになった成果と問題点を踏まえ、インテリア関連の資格取得支援を伴った教育のあり方に関するガイドラインの提示も試みる。

2 先行研究と本研究の位置づけ及び本研究の学術的特色

インテリアコーディネーターと短大教育に関する研究には太田さち氏の先行研究¹がある。しかし発行が1994年であることから、短大生が在学期間中にインテリアコーディネーター資格試験に挑戦できるようになる遥か以前の事例研究である。これ以外に、短大教育とインテリア教育の関連を研究した先行研究²も幾つか見られるが、インテリア関連の資格取得を支援する試みが及ぼした教育効果について定量的分析を行った先行研究は稀有である。近年、資格取得支援を学生募集の看板に掲げる大学・短大・専門学校がとみに多くなっている。しかしながら、実際の合格者数を公表している事例は極めて少ない。これに対して、本学住居学科では実際に合格者を輩出しており、その取り組みにおける実績データの蓄積がある。この点が本研究の特徴である。

3 研究調査対象・期間

本研究の研究対象は、インテリアコーディネーター資格試験の受験年齢制限が撤廃された平成15年度から19年度（昨年度）までの間、本学住居学科に在籍した学生の内、特にインテリアの学びを志した者とする。尚、本研究においては在学中の資格取得支援の教育的効果の確認が目的であるので、試験結果はあくまでも在学中のものに限定した。本学

住居学科における教育成果は、卒業後実社会において大いに発揮されるべきものであるが、今回の研究では卒業後に取得した資格に関しては調査研究対象から除外した。

4 研究方法

本研究では最初に、本学住居学科が各種資格試験をどのように位置付けていたのかを、入試用ガイドブックに記された当時の学科長のことばから明らかにする。また平成16年度の新生全員に対して行ったアンケート調査「在学中に受験を希望する資格試験」の結果から、在学中の資格取得志向の高まりを検証する。次に、本学住居学科においてインテリアの学びを志す学生にとって一番人気が高い資格であるインテリアコーディネーター資格試験の概要を社団法人インテリア産業協会(略記する場合はインテリア産業協会と表記)の資料からまとめる。そして平成15年度から19年度までの5年間における本学住居学科の試験対策の概要をまとめ、実際の試験結果の分析及び評価と考察を行う。それから、色彩検定、リビングスタイリスト資格試験、照明コンサルタント資格講座などへの学科としての取組みの概要をまとめ、その結果分析及び評価と考察を行う。そして最後に、インテリア関連の資格取得支援を伴った教育のあり方に関するガイドラインを提示する。

II 住居学科における資格取得支援の位置付け

1 在学中の公的民間資格取得の意義について

ここでは、本学住居学科在学中に各種の公的民間資格を取得することの意義がどのようなものであったかを、入試用ガイドブックに記された当時の学科長原田清教授のことばから明らかにする。平成17年度入試用ガイドブックにおける学科長挨拶では、インテリアの学びを志向する学生が近年の住居学科受験生に増えてきたこと、在学中に各種検定試験に合格することを通して学生がスキルアップすること、そして社会人として必要な一般教養を身につけ、最終的に「住」の専門家になって欲しいという強い希望が述べられている³。そして平成18年度入試用ガイドブックにおける学科長挨拶では、インテリアデザインコース、リフォーム・建築デザインコース、福祉住環境コースの3コースが新設されたことが説明されている⁴。平成18年度より前は、住居学科に入学した学生は等しく1年次には2級建築士受験に関わる基本的な建築系の科目を履修していた。そして2年次になってから、建築ルート、インテリアルート、福祉住環境ルートの3ルートに分かれて、更に専門の学びを深めていた。しかしこれでは、資格試験に挑戦するのは2年次後期になってしまい、せっかく取得した資格も就職活動に活用することはできない。また、入学時にインテリアの学びを志して入学しても、そのモチベーションを2年間持続させることは中々困難である。このような状況を考慮して、平成18年度からは入学直後から、インテリア

デザインコース、リフォーム・建築デザインコース、福祉住環境デザインコースの3コースに分かれて、1年次前期の内から入学当初希望していた資格試験に挑戦できるように学科内部のカリキュラムを整備して対応することになった。そして1年次で希望する資格を取得した学生は、別の種類の資格試験にも挑戦できるように配慮されるようになった。この点は平成19年度入試用スクールガイドにおける学科長挨拶に詳しく記されている⁵。

更に論者の意見として、在学中の資格取得の意義に関して以下の点を挙げておく。第一点目は、就職活動において学生が自信を持つことができるということである。就職活動において、職歴のない学生にとってのアピールポイントは学歴と資格だけである。四大生と並んで就職活動をする短大生の立場では公的に認定されている資格を記入できることは有利である。第二点目は、一度取得した資格は一生身につけてくるということである。本学住居学科は短期大学であるので女性の学生が大半を占めている。男女雇用機会均等法の施行以降も、女性の場合はライフスタイルの変化から職場を離れざるを得ないこともままあるのが現実である。しかしまた暫くして社会に復帰しようと思ったときに、やはり職歴と共に資格があると再就職に有利である。そして第三点目として、このような資格取得という明確な目標を持つことは、平素の学業に積極的に取り組む動機付けになるという利点を挙げるができる。

2 在学中に受験を希望する資格試験に関するアンケート調査結果

平成16年度の新入生全員に対して、論者が当時担当していたある必修科目において幾つかのアンケート調査を行った。そのアンケートには、「1年生で受験したい資格試験」、「2年生で受験したい資格試験」という質問が含まれていた。このアンケート結果を図1に示す。尚、このアンケートは複数回答可ということで調査した。

まず、この結果から判ることは、在学中の資格取得志向が極めて高いということである。

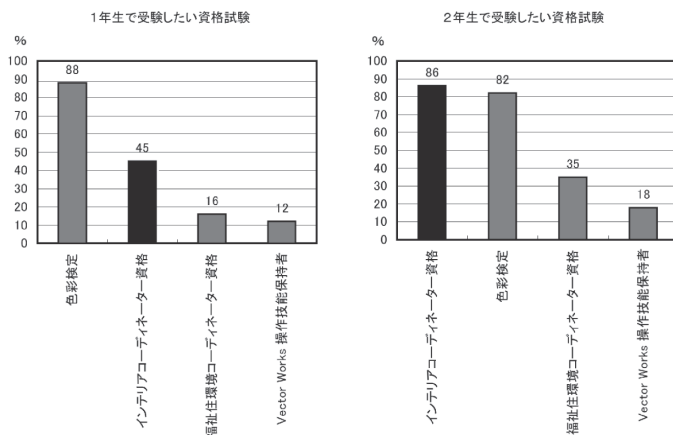


図1 平成16年度住居学科入学者アンケート結果

色彩検定については、在学中の受験を全体の80%以上の学生が希望していた。またインテリアコーディネーター資格試験については、1年生で受験したいという学生は全体の約半数であったが、2年生になってから受験したいという学生は全体の80%以上もいた。次に、在学中に取得する可能性のある資格試験の中

でも、色彩検定やインテリアコーディネーター資格試験というインテリア系の資格試験に人気があったということである。

但しこれはあくまでも当該年度の新入生の入学時における希望調査結果であるので、実際に希望通りに受験をした訳ではなかった。短大生にとっての就職活動は一般的に1年次の10月から始まる。そして早い学生は2年次5月の連休前後に内定を貰う。従って就職活動の時点で履歴書の資格欄に在学中に取得した資格を記入したければ、1年次にこれらの資格試験に挑戦して取得しなければならないという厳しい現実がある。そこで当該年度の学生についても、実際の受験は1年次の方が多かった。2年次になるとインテリアコーディネーター資格試験の難度の高さから再受験を敬遠する傾向が見られた。また短大生は、2年次前期は就職活動で手一杯となり中々勉強に集中できず、2年次後期になると卒業設計と卒業論文に取り組むため、やはり資格試験対策は疎かにならざるを得なかった。

Ⅲ インテリアコーディネーター資格試験

1 インテリアコーディネーター資格試験の概要

1) インテリアコーディネーターの定義

インテリアコーディネーターとは「インテリアエレメントの流通過程において、消費者に対し、商品選択とインテリアの総合的構成等について、適切な助言と提案を行う人」である⁶。すなわち「インテリア商品と販売」及び「インテリア計画と技術」の両面の知識と技能を兼ね備えた人材である。またインテリアコーディネーター資格とは、「インテリア商品の流通」に関する資格とすることができる。このインテリアコーディネーター資格試験は平成20年度で26回目になる比較的伝統のある資格試験である。その創設当初は、インテリアエレメントの流通を促進するために、(旧)通商産業大臣認定資格として始まったが、現在では「民のことは民へ」との行政改革により、社団法人インテリア産業協会認定の公的民間資格として定着している。しかし四半世紀を経て、その受験制度も大きく変化してきた。インテリアコーディネーター資格試験開始直後には、受験資格に年齢制限があった。かつては、「一次試験が行われる日の属する年度の4月1日における年齢が25歳未満の方は受験することができない⁷」という年齢制限があった。これは当初インテリアの実務経験を有する者を受験者として想定していたことを示している。しかしこの年齢制限は時の経過と共に徐々に緩和され、平成15年度の第21回試験からは、受験年齢制限が撤廃された。これにより同年度から、本学住居学科の学生にとっても、在学中にインテリアコーディネーター資格試験に挑戦できるようになった。

2) インテリアコーディネーター資格試験制度

インテリアコーディネーター資格試験においては、一次試験2科目「商品と販売」、「計

画と技術」の両方を合格した者だけが、二次試験の「論文」と「製図」を受験できる仕組みになっている。もし一次試験の2科目のうち1科目だけに合格した場合は、翌年から3年間に限り、合格した科目の試験が免除される。またもし一次試験に合格したが二次試験で不合格になった場合は、翌年から3年間に限り、一次試験が免除される。

このような資格試験制度のため、現在のインテリアコーディネーター資格試験の種類には、「一次基本タイプ」、「二次専攻タイプ」、「一次先取りタイプ」といったものがある。「一次基本タイプ」とは、出願時点で「一次試験+二次試験」の受験を希望するタイプである。当然一次試験に合格しなければ二次試験には進めない。また「二次専攻タイプ」とは二次試験不合格者が一次試験免除期間中に受験する場合である。そして「一次先取りタイプ」とは、たとい一次試験を合格してもその年度には二次試験を受験することはできないものである。この受験種別における「一次基本タイプ」と「二次専攻タイプ」を合わせた受験者全体の中から、最終的に二次試験まで合格した者全体の合格率の過去5年間の平均は約21%前後で推移している(表7)。合格率だけから言えば、インテリアコーディネーター資格試験とは、国家資格である2級建築士資格試験よりも若干難度が高い資格試験である。

ところで、一次試験だけの合格率の過去5年間の平均は26.4%前後で推移しているが、二次試験だけの合格率の過去5年間の平均は56.8%前後で推移している(表5、6)。このことから明らかなように、インテリアコーディネーター資格試験においては一次試験に合格することが最難関である。この一次試験は択一式の客観評価試験であるが、合格基準点数が設定されている訳ではない。その代わりに、毎回の受験生の偏差値によって合格基準点数が決定されるという仕組みになっている。つまり、他の資格試験に見られるような「満点に対して約70%が合格基準点数」というのではなく、インテリアコーディネーター資格一次試験の両科目それぞれにおいて、上位から約30%のところに合格ラインを設けるという仕組みである。したがって問題の難度が高かった年度の合格基準点数は当然低く、逆に素直な問題が多かった年度の合格基準点数は当然高くなる。つまり、インテリアコーディネーター資格一次試験に合格するためには、全受験生の中で上位に食い込まなければならない訳である。そしてこの試験には現在受験年齢制限がないので、社会人も学生も同じ土俵で評価される。一度も社会経験がなく、インテリアの現場も知らない学生が、既にインテリアの職務に就いている社会人に対して挑戦するという事は、極めて困難な試みである。

また一次試験については、2科目の内1科目に合格すれば翌年度から3年間は、その合格した方の科目は免除されるが、合格率がかなり厳しいので、その3年間に残りの1科目を合格して一次試験を突破することはかなり困難である。事実、一次試験1科目だけを合格して社会人になった本学住居学科の卒業生の中に、卒業後3年間挑戦し続けても、結局残りの1科目が合格できずに、免除期間が終了してしまった者が少なからずいた。

しかし二次試験については、二次試験の受験者の約半数以上が合格でき、しかも一次試験に合格した年度を含めて4回のチャンスがある⁸ので、一次試験に比較すれば二次試験は容易である。このように、インテリアコーディネーター資格試験においては、一次試験突破が合格への鍵になっている。

3) インテリアコーディネーター資格試験の出題範囲

インテリア産業協会が公表しているインテリアコーディネーター資格試験の出題範囲⁹は表1の通りである。これによれば、「インテリア計画と技術の基礎知識」分野における試験範囲は、住宅構造、インテリア構成材、室内環境、インテリア基礎、インテリア計画、表現技法、関連法規である。そして「インテリア商品と販売の基礎知識」分野における試験範囲は、インテリア商品・部材、インテリア販売、インテリア情報、コンサルティング、積算・見積、住環境である。しかしこれでは漠然としていて、何をどのように勉強すればよいか解りにくい。そこで、インテリア産業協会が公式ハンドブックとして承認してい

表1 インテリアコーディネーター資格試験範囲(1)

■一次試験	
◆インテリア計画と技術の基礎知識(100分)	
1. 住宅構造	住宅構造(工法)の種類、構造材料の種類、下地材と下地施工の種類と特性等に関する基礎知識を有していること。
2. インテリア構成材	内装仕上材(床・壁・天井)、造作・開口部の種類・特徴と仕上施工の特性、住宅部品、機能材料等に関する基礎知識を有していること。
3. 室内環境	熱(属性・日射等)、湿気(湿度・結露)、空気(換気・通風)、音(遮音・吸音)、光(属性・採光等)等に関する基礎知識を有していること。
4. インテリア基礎	空間計画(各室計画・リフォーム計画)、人間工学、モジュラーコーディネーション、インテリアの歴史等に関する基礎知識を有していること。
5. インテリア計画	設備計画(衛生・空調・電気・安全設備)、照明計画、彩色計画等に関する基礎知識を有していること。
6. 表現技法	設計図書、実務基礎、造形の基本(空間構成と造形)、CAD・CG等に関する基礎知識を有していること。
7. 関連法規	インテリアの関連法規(消費者保護・製品関連・販売モラル・建築関連等)の法規法令の基礎知識を有していること。
◆インテリア商品と販売の基礎知識(100分)	
1. インテリア商品・部材	主要インテリア商品、インテリア施工関連商品、その他のインテリア商品に関する基礎知識を有していること。
2. インテリア販売	マーケティング、流通チャネル、インテリアビジネス等に関する基礎知識を有していること。
3. インテリア情報	情報の基本、情報の処理、情報システム等に関する基礎知識を有していること。
4. コンサルティング	コンサルティングの基本、コンサルティング・セールス、プレゼンテーション等の基礎知識を有していること。
5. 積算・見積	設計図書、仕様書、工事の積算、見積用語等の基礎知識を有していること。
6. 住環境	室内環境(安全環境)に配慮した商品、廃棄物に配慮した商品、高齢者に配慮した生活空間、バリアフリーを考慮した住空間コーディネート等に関する基礎知識を有していること。
■二次試験	
◆論文試験(80分)	インテリアコーディネーターとしての資質、能力、職業倫理が備わっていること。また、居住環境(住まいの健康・安全等)、コンサルティング、インテリア計画に関する課題についての問題点の捉え方、理解力、判断力、表現力等を有していること。
◆プレゼンテーション試験(140分)	一次合格で理解した基礎知識を基に、多様なインテリア計画に関する基本コンセプトの作成、プランニング(計画立案)、プレゼンテーション(提案)の総合的な実務能力を有していること。(図面の作成、色鉛筆を使用して彩色等)

る『インテリアコーディネーターハンドブック販売編 [改訂新版] 及び技術編』（インテリア産業協会, 2006/2003）によると、実際の試験範囲は表2の通りとなる。尚、この表2には本学住居学科のインテリアコーディネーター資格特別講座において使用したテキスト・辞典の目次分類、及び本学住居学科における正規科目との対応も併記した。この表に

表2 インテリアコーディネーター資格一次試験範囲 (2)

■一次試験			
◆インテリアの計画と技術の基礎知識			
インテリアコーディネーター・ハンドブック【技術編】	合格教本【技術編】	プロ用語	住居学科 正規科目
1 住宅と社会			住生活学
2 インテリアの歴史	1章 インテリアの歴史	1 インテリア史・日本 2 インテリア史・西洋	インテリア史
3 人間工学	2章 人間工学とインテリア計画	3 人間工学	住生活学 インテリア計画論 (後期)
4 インテリアの計画	2章 人間工学とインテリア計画	3 人間工学	インテリア計画論 (後期) リフォーム学 (2年)
5 造形	7章 色彩と造形	7 色彩造形	基礎デザイン 色彩学
6 建築構造と構成材料	4章 建築構造と施工 5章 建築材料	5 構造・施工	木造建築論
7 インテリア構法	4章 建築構造と施工 5章 建築材料	5 構造・施工	木造建築論 施工学 (2年後期)
8 環境工学	3章 環境工学	4 環境工学 17 関連テーマ	環境計画論
9 住宅設備	6章 建築設備	9 設備	設備学 (後期)
10 表現技法	8章 表現技法	8 表現技法	透視図法
11 インテリア関連法規	9章 建築関連法規	16 法規	建築法規
◆インテリア商品と販売の基礎知識			
インテリアコーディネーター・ハンドブック【販売編】	合格教本【販売編】	プロ用語	住居学科 正規科目
1 インテリアコーディネーターとは	1章 ICの仕事	15 販売	インテリアエレメント
2 情報と販売	1章 ICの仕事 10章 関連情報	15 販売 17 関連テーマ	インテリアエレメント
3 プレゼンテーション	1章 ICの仕事	8 表現技法	インテリアデザイン
4 床仕上げ材	6章 仕上材・塗料	6 材料	インテリア材料学 材料学 (後期)
5 壁仕上げ材	6章 仕上材・塗料	6 材料	インテリア材料学 材料学 (後期)
6 天井仕上げ材	6章 仕上材・塗料	6 材料	インテリア材料学 材料学 (後期)
7 造作部品	7章 建具・造作部品	13 建具	インテリア設備学
8 建具製品	7章 建具・造作部品	13 建具	インテリア設備学
9 塗料・塗装	6章 仕上材・塗料	6 材料	インテリア材料学 材料学 (後期)
10 住宅設備機器	8章 住宅設備機器	9 設備	インテリア設備学
11 照明	4章 照明	12 照明	インテリアエレメント
12 家具	2章 家具	10 家具	インテリアエレメント
13 ウインドウトリートメント	3章 ファブリックス	11 ファブリックス	インテリアエレメント
14 寝装・寝具	5章 寝装・寝具	14 各種エレメント	インテリアエレメント
15 テーブルウェア・キッチン用品	9章 他のエレメント	14 各種エレメント	インテリアエレメント
16 インテリア・オーナメント	9章 他のエレメント	14 各種エレメント	インテリアエレメント
17 エクステリアエレメント	9章 他のエレメント	14 各種エレメント	インテリア材料学
18 その他の領域			インテリアエレメント
19 ユニバーサルデザイン	10章 関連情報	17 関連テーマ	バリアフリー住宅論 (2年) インテリア設備学
20 住まいのリフォーム			インテリア設備学 リフォーム学 (2年)

よれば、「計画と技術」分野における具体的な試験範囲は、住宅と社会、インテリアの歴史、人間工学、インテリアの計画、造形、建築構造と構成材料、インテリア構法、環境工学、住宅設備、表現技法、インテリア関連法規となる。そして「商品と販売」分野における具体的な試験範囲は、インテリアコーディネーターとは、情報と販売、プレゼンテーション、床仕上げ材、壁仕上げ材、天井仕上げ材、造作部品、建具製品、塗料・塗装、住宅設備機器、照明、家具、ウインドウトリートメント、寝装・寝具、テーブルウエア・キッチン用品、インテリア・オーナメント、エクステリアエレメント、その他の領域、ユニバーサルデザイン、住まいのリフォームとなる。そこで、実際の正規のカリキュラム及び課外授業の特別講座におけるカリキュラムは、この分類に基づいて構成することになった。

2 インテリアコーディネーター資格試験への取組みの概要

1) 一次試験対策

(1) 概要

平成15年度から19年度までの本学住居学科におけるインテリアコーディネーター資格一次試験への取組みの概要を表3に記す。この表から明らかなように、本学住居学科におけるインテリアコーディネーター資格一次試験に対する対策は毎年改良を加えられてきた。つまり毎年全く同じことをやってきた訳ではなかった。尚、平成18年度からは、1年次からコース分けするカリキュラムを導入したので、インテリアコーディネーター資格試験に対応する正規科目を1年次から十分に履修することができるようになった。

(2) 正課外の支援

a) 前期特別講座・夏期休業中特別講座 インテリアコーディネーター資格一次試験対策の目玉は、「インテリアコーディネーター資格講座」と題した課外授業の特別講座であった。平成15年度から18年度までは、株式会社ハウジングエージェンシーの教育部門であるインテリアスクール「ヒップス」に講座の運営を委託した。そしてそれを補完するために、学内で課外授業を行った。この外部委託の特別講座は当初、夏休み終わりの9月上旬に2週間だけ開講していたが、平成16年度に一次試験合格者が出なかったことから、平成17年度以降は前期中に前倒しして実施することになった。それに伴って9月上旬には、前期の特別講座の補講や過去の模擬試験等を検討する授業を行った。そして平成19年度については、本学住居学科内で特別講座の企画運営を実施することになり、上田耕二氏、仲田幸江氏、当時の学科長原田清教授、新井竜治が講義を担当した。

b) 模擬試験 模擬試験に関しては、平成15年度から19年度の5年間、株式会社ハウジングエージェンシーが主催する「全国統一模擬試験」を受験させた。当初は1回だけの受験であったが、夏期休業中の学習成果を測定するために、平成17年度からは毎年2回受験させることになった。

c) 夏期休業中課題・見学会 夏期休業中の宿題については、当初良い教材が見当たらなかったが、平成18年度からインテリア問題研究会編の『1次試験予想問題徹底研究』を用いることにした。この問題集にある販売編100問、技術編100問、合わせて200問を2回解くことによって、前期に終了した試験範囲の学習内容の復習と同時に、最新の出題傾向を理解する機会とした。これはあくまでも主体的に取り組む自己学習であったが、休み明

表3 インテリアコーディネーター資格一次試験対策

内 容		平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
正 課 外	前期特別講座	—	自主ゼミ 販売編4回・技術編2回	ハウジングエージェンシー 販売編9回・技術編10回 (毎回復習テスト) (5月末～8月上旬) 過去問題・自主ゼミ 販売編6回・技術編6回	ハウジングエージェンシー 販売編6回・技術編7回 (毎回復習テスト) (5月末～8月上旬)	共栄短大オリジナル講座 販売編8回・技術編11回 (毎回復習テスト) (5月末～8月上旬)
	模擬試験	模擬試験①9月上旬学内	模擬試験①9/6・10学内	模擬試験①8/9学内 模擬試験②9/11都内	模擬試験①8/6都内・在宅 模擬試験②9/10都内・在宅	模擬試験①8/8学内 模擬試験②9/9都内
	夏期休業中課題	—	—	技術編ハンドブック ノートまとめ課題	予想問題200問×2回	予想問題200問×2回
	夏期休業中特別講座	ハウジングエージェンシー 販売編8回・技術編11回 (毎回復習テスト) (8月末～9月上旬)	ハウジングエージェンシー 販売編8回・技術編11回 (毎回復習テスト) (8月末～9月上旬)	—	販売編補講2回(9月上旬) 技術編補講6回(9月上旬) 過去模擬試験+解説3回	技術編補講2回(9月上旬) 過去模擬試験+解説5回
	夏期休業中見学会	—	自主見学 家具・窓装飾品・照明器 具・水回機器メーカー ショールーム	—	春日部住宅展示場 沙留ナショナルセンター	(春日部住宅展示場) 【台風のため中止】
	学内直前講座	—	過去模擬試験+解説2回 (各自復習を指示)	直前ドリル 販売編3回・技術編3回	直前ドリル 販売編3回・技術編3回 (各自復習を指示・監理)	直前ドリル 販売編3回・技術編3回 (各自復習を指示・監理)
外部直前講座	—	—	100問特別講座7名派遣	100問特別講座7名派遣	100問特別講座9名派遣	
正 課 内	関連正規科目 1年次生	環境計画論 構造力学 木造建築論 日本住宅史 西洋住宅史 材料学 住生活学 色彩学 透視図法 基礎デザイン 基本製図 設計製図Ⅰ インテリア計画論	構造力学 木造建築論 住居史 インテリア史 材料学 住生活学 色彩学 透視図法 基礎デザイン 基本製図 設計製図Ⅰ	構造力学 木造建築論 住居史 インテリア史 材料学 住生活学 色彩学 透視図法 基礎デザイン 基本製図 設計製図Ⅰ インテリアエレメント【聴講】 インテリアマーケティング【聴講】 【販売編ハンドブックノートまとめ課題】	インテリアエレメント インテリア設備学 インテリア材料学 【Web 語句調べ課題】 【ホームセンター見学会】 インテリアコーディネーターゼミ 【過去問題8年分演習】 インテリア史 木造建築論 建築法規 構造力学 環境計画論 インテリア計画論 色彩学 設備学 材料学 インテリア計画論 住生活学 透視図法 基礎デザイン	インテリアエレメント インテリア設備学 インテリア材料学 【Web 語句調べ課題】 インテリア史 木造建築論 建築法規 構造力学 環境計画論 インテリア計画論 インテリアエレメント インテリア設備学 インテリア材料学 インテリア計画論 住生活学 透視図法 基礎デザイン
	関連正規科目 2年次生	構造計画論 (設備学) (施工学) (建築法規) インテリアエレメント インテリア史 設計製図Ⅱ インテリアデザイン (バリアフリー住宅論) (リフォーム学)	構造計画論 (設備学) (施工学) (建築法規) インテリアエレメント インテリア史 設計製図Ⅱ インテリアデザイン (バリアフリー住宅論) (リフォーム学)	構造計画論 環境計画論 (設備学) (施工学) (建築法規) インテリアエレメント インテリアマーケティング インテリア計画論 設計製図Ⅱ インテリアデザイン ガーデニングデザイン (バリアフリー住宅論) (リフォーム学)	構造計画論 環境計画論 (設備学) (施工学) (建築法規) インテリアエレメント インテリアマーケティング 【販売編ハンドブックノートまとめ課題】 インテリア計画論 設計製図Ⅱ インテリアデザイン ガーデニングデザイン (バリアフリー住宅論) (リフォーム学)	インテリアコーディネーターゼミ 【過去問題8年分演習】 施工学 構造計画論 住居史 インテリアデザイン ガーデニングデザイン (バリアフリー住宅論) (リフォーム学)
試 験 後		—	—	問題解説会	問題解説会	問題解説会
一 次 試 験 受 験 者	販 売 編	2名	0名	5名	3名	0名
	技 術 編	5名	5名	5名	3名	4名
	一次合格	2名	0名	4名	2名	0名

*本表には当該年度に実施されていた年次別カリキュラムを示してある。よって、当該年度に1年次生であった学生の2年次カリキュラムは矢印の示す先の通りとなる。

けに自己採点済の回答用紙を提出させたので、実施率は極めて高かった。その他、地元春日部の住宅展示場を見学させていただいたり、汐留のナショナルセンターを見学させていただいたりした年度もあった。このような現物に触れる機会としては、夏期休業期間は最適である。

d) 学内直前講座・学外直前講座 9月下旬には、本試験に向けた準備のため、『直前予想ドリル』を用いた直前講座を開講した。その他、販売編 50 問と技術編 50 問の計 100 問を解いた直後に解説を行う外部の特訓講座に、模擬試験の成績優良者を若干名派遣した。

(3) 正課内の関連履修科目

正規科目内においても、インテリアコーディネーター資格試験を念頭に置いた授業を講師の方々心がけていただいた。具体的な科目名は表 3 を参照していただくとして、以下では、論者が考案した 2 つの教材を紹介する。



図 2 Web 重要語句調べ課題

a) Web 重要語句調べ課題 インテリアコーディネーター資格一次試験は、専門語句の定義を正確に理解していることが、合格する上で非常に重要である。そこで論者は、インテリア問題研究会編『プロ用語辞典』の用語に最新の重要語句を加えたオリジナルの Web ページを作成した(図 2)。これは Google® 検索にリンクされていて、キー

ワードのラジオボタンにチェックを入れて「Google®検索」のボタンを押すと、新しいウィンドウに検索結果が表示されるようにしたものである。そしてその検索結果画面から更に「イメージ検索」すれば、実際の画像を確認することができるというものである。論者が作成した「Web 重要語句調べ課題」は全 10 編あり、主にインテリアの「商品と販売」分野に特化している。具体的には、①家具、②ファブリックス、③照明、④寝具・テーブルウエア・インテリアオーナメント、⑤建具、⑥造作、⑦設備、⑧床構法と仕上材、⑨壁・天井構法と仕上材、⑩屋根仕上・塗料であった。学生にはこれらを論者が担当した正規科目である「インテリアエレメント」、「インテリア材料学」、「インテリア設備学」の課題として課したので、受講学生は相当量の画像入りファイルを作成することになった。

b) **建築資材・インテリアエレメント・メーカーリンク集** 論者が作成したもう一つのオリジナル教材は、インテリアの専門家でも使用できるような「建築資材・インテリアエレメント・メーカーリンク集」である。このようなリンク集は既にネット上に存在しているように思われるが、インテリアコーディネーターにとって必要な優良メーカーだけを集めたリンク集というものは殆どない。勿論、インテリア産業協会に加盟している企業については同協会のホームページにリストされてリンクが張られているが、実際には同協会に加盟していなくても試験範囲に含まれる重要な商品を製造している企業がある。論者が作成したリンク集は、これらのメーカーも網羅したものである。そしてこのリンク集は、前述の「Web 重要語句調べ課題」において補助的に活用させた他、設計製図課題におけるインテリアエレメントのプレゼンテーションボード作成にも使用させた。

(4) インテリアコーディネーター資格一次試験対策テキスト

a) **正規授業使用テキスト** 正規授業において使用したテキストは、社団法人インテリア産業協会編の『インテリアコーディネーターハンドブック販売編 [改訂新版] 及び技術編』（インテリア産業協会, 2006/2003）であった。このハンドブックは、教科書として用いるには数々の問題点があった。例えば、記述の不備や図版の誤りもあったが、一番の問題点は記述が論文調で暗記には不向きであるという点である。しかしインテリア産業協会の公式テキスト的性格を持つものであるので、やはり避けては通れなかった。そこで論者が担当した販売編の講義においては、販売編のハンドブックから重要な語句をすべて抜粋してレジメを作成することにした。授業においては合わせて画像を映写して、重要語句の理解の促進に寄与した。

b) **正課外使用テキスト** 一次試験対策の課外特別講座において使用したテキストは、インテリア問題研究会編の『合格教本販売編及び技術編』第3版～第5版（ハウジングエージェンシー, 2003～2006）であった。前述のハンドブックと比較すると、このテキストは各単元の要点がきちんとコンパクトにまとめられている優れた教材である。この他に、同研究会編の『図でわかる新版インテリアコーディネータープロ用語辞典』（ハウジングエージェンシー, 2002/2003）を用いた。この辞典を完璧に覚えれば必ず一次試験を合格できるほど、全試験範囲の重要語句が網羅されている。そこでこの辞典については、前述の「Web 重要語句調べ課題」で取り組ませた。また一次試験対策としての過去問題集は、同研究会編の『1次試験過去問題徹底研究販売編及び技術編』平成15～19年度版（ハウジングエージェンシー, 2003～2007）を用いた。過去問題については3回取り組むことが理想だが、少なくとも2回は取り組む課題を用意した。そして夏期休業中に取り組んだ予想問題集は、同研究会編の『1次試験予想問題徹底研究』平成18～19年度版（ハウジングエージェンシー, 2006～2007）であった。また直前講座では、同研究会編の『直前予想ドリル』平成17～19年度版（ハウジングエージェンシー, 2005～2007）を使用

した。

2) 二次試験対策

(1) 概要

平成 15 年度から 19 年度までの本学住居学科におけるインテリアコーディネーター資格二次試験への取組みの概要を表 4 に記す。二次試験は一次試験と全く異なり、論文課題及び製図課題に対する添削という個別指導が非常に重要な支援活動になる。そこで当初は、一次試験合格者に対する時間外の個別指導で対応していた。しかし平成 18 年度にカリキュラムが改正されてからは、正規科目である「インテリアコーディネーター製図ゼミ」において、これらの個別指導を行った。その前年度の平成 17 年度は、「家具・照明計画」という授業の中で二次試験対策を行った。けれどもいずれの場合も時間が不足していたので、実際に二次試験に挑戦する学生に対しては、時間を延長して指導を行った。特に二次試験の製図課題については、着彩を入れて 140 分間で仕上るという時間配分を学生が体得しなければならなかった。そこで毎回通常の授業時間を延長して授業を行った。平成 17 年度に二次試験を合格した学生のコメントは、この指導の効果を如実に物語っている¹⁰。

表 4 インテリアコーディネーター資格二次試験対策

内 容		平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
正課外	自主ゼミ	自主ゼミ (過去問題 10 年分+予想問題演習)	—	家具・照明計画の時間延長分 (過去問題 10 年分+予想問題演習)	インテリアコーディネーター製図ゼミの時間延長分 (過去問題 10 年分+予想問題演習)	インテリアコーディネーター製図ゼミの時間延長分 (過去問題 10 年分+予想問題演習)
	関連正規科目 1 年次生	透視図法 基本製図 設計製図 I	透視図法 基本製図 設計製図 I	家具・照明計画【聴講】 (過去問題 10 年分+予想問題演習) 透視図法 基本製図 設計製図 I	インテリアコーディネーター製図ゼミ (過去問題 10 年分+予想問題演習) 透視図法 基本製図 設計製図 I *	インテリアコーディネーター製図ゼミ (過去問題 10 年分+予想問題演習) 透視図法 基本製図 設計製図 I
正課内	関連正規科目 2 年次生	設計製図 II 卒業設計 インテリアデザイン	設計製図 II 卒業設計 インテリアデザイン	家具・照明計画 (過去問題 10 年分+予想問題演習) 設計製図 II 卒業設計 インテリアデザイン インテリア CAD I・II	インテリアコーディネーター製図ゼミ (過去問題 10 年分+予想問題演習) 設計製図 II 卒業設計 インテリアデザイン インテリア CAD I・II	インテリアコーディネーター製図ゼミ (過去問題 10 年分+予想問題演習) 設計製図 II 卒業設計 インテリアデザイン インテリア CAD I・II
	その他	見学会	東京国際家具見本市 ジャパンテックス	東京国際家具見本市 ジャパンテックス	東京国際家具見本市 ジャパンテックス	東京国際家具見本市 ジャパンテックス
試 験 後		—	—	問題解説会	問題解説会	問題解説会
二次試験合格者		1 名	0 名	1 名	2 名	1 名

*本表には当該年度に実施されていた年次別カリキュラムを示してある。よって当該年度に 1 年次生であった学生の 2 年次カリキュラムは矢印の示す先の通りとなる。

(2) インテリアコーディネーター資格二次試験対策テキスト

二次試験対策に使用したテキストは、過去問題集と予想問題集である。過去問題集には、インテリア問題研究会編の『2 次試験過去問題徹底研究』平成 15 ~ 19 年度版 (ハウジングエージェンシー, 2003 ~ 2007) を使用した。また予想問題集には、同研究会編の『2

次試験製図予想問題徹底研究』平成15～19年度版（ハウジングエージェンシー，2003～2007）を用いた。正規の演習科目と、その時間延長をしての補講においては、過去問題10年分と予想問題8～9問に取り組んだ。毎回本番と同じ時間を計って実施して、その後回収して次回までに添削して返却した。時間の関係で、学内で実施できない場合もあったので、予想問題については宿題として自宅にて時間を計り実施させてから提出させ、同様に添削した上で返却した。

3 インテリアコーディネーター資格試験の結果及び評価

1) 全体の受験者・合格者について（平成15～19年度：5年間）

表5～7は、平成15年度から19年度までの5年間におけるインテリアコーディネーター資格試験の結果に関するインテリア産業協会内部の資料に基づき論者が作成したものである。但し共栄学園短期大学住居学科の結果に関しては、学内で独自に調査した結果をまとめたものである。

(1) 一次試験

表5によれば、この5年間におけるインテリアコーディネーター資格一次試験受験者の全体数の平均は年15,000人前後で推移している。そして、一次試験合格者の全体数の平均は年4,000人前後で推移している。そこで、一次試験を合格した者全体の合格率の平均は約26%前後で推移している。

(2) 二次試験

表6によれば、この5年間におけるインテリアコーディネーター資格二次試験受験者の全体数の平均は年5,600人前後で推移している。二次試験は、当該年度の一次試験合格者と前年度までの二次試験不合格者で一次試験免除者が受験する。そして、二次試験合格者の全体数の平均は年3,200人前後で推移している。そこで、二次試験を合格した者全体の合格率の平均は約57%前後で推移している。

(3) 最終合格率（一次基本タイプ+二次専攻タイプ）

表7によれば、この5年間におけるインテリアコーディネーター資格の「一次基本タイプ+二次専攻タイプ」の受験者の全体数の平均は年15,000人前後で推移している。そして、「一次基本タイプ+二次専攻タイプ」の合格者の全体数の平均は年3,200人前後で推移している。そこで、「一次基本タイプ+二次専攻タイプ」で最終合格した者全体の合格率の平均は約21%前後で推移している。

2) 学生の受験者・合格者について（平成15～19年度：5年間）

(1) 一次試験

表5によれば、この5年間におけるインテリアコーディネーター資格一次試験を受験した学生数の平均は年2,900人弱で推移している。そして、一次試験を合格した学生数の

平均は年 360 人前後で推移している。そこで、一次試験を合格した学生の合格率の平均は約 13%前後で推移している。「学生」に属する受験者の一次試験合格率の平均は、1位の専門学校生で平均 13.8%、2位の大学生で平均 12.8%、3位の高校生で平均 5.6%、4位の短大生で平均 5.0%であった。そして本学住居学科の一次試験合格率の平均は 6.1%であった。一次試験を合格した者全体の合格率の平均が約 26%前後なのに比べて、一次試験を合格した学生の合格率の平均は約 13%前後であった。このことは、一般社会人に比べて学生が一次試験に合格することが非常に難しいということを示している。また表 5 によれば、一次試験受験者全体に占める学生受験者の割合が約 19%前後で推移しているのに対して、一次試験合格者全体に占める学生合格者の割合は僅か約 9%前後であり、約半分である。これは、社会人としての実務経験がないと解けないような難度の高い問題が一次試験に出題されることが原因であると考えられる。

表 5 インテリアコーディネーター資格 一次試験 受験者数・合格者数

出典：(社) インテリア産業協会・共栄短大住居学科については独自調査結果

年 度	回	一次 全体			一次 学生 計			学生/全体(%)		大学生			短大生			(内・共栄短大住居学科)(*)						専門学校生			高校生		
		一次 受験者	一次 合格者	合格 率%	一次 受験者	一次 合格者	合格 率%	一次 受験者	一次 合格者	一次 受験者	一次 合格者	合格 率%	一次 受験者	一次 合格者	合格 率%	一 次 受 験 者	一 次 受 験 者	指 導 者	監 査 者	合 格 率	採 択 率	一 次 受 験 者	一 次 受 験 者	合 格 率	一 次 受 験 者	一 次 受 験 者	合 格 率
平成 15 年度	第 21 回	15,770	4,125	26.2	2,676	330	12.3	17.0	8.0	1,183	130	11.0	110	3	2.7	22	2	5	2	9.1	67	1,320	191	14.5	63	4	6.3
平成 16 年度	第 22 回	15,755	4,183	26.6	3,122	350	11.2	19.8	8.4	1,451	170	11.7	123	4	3.3	24	0	5	0	0.0	0	1,477	173	11.7	71	2	2.8
平成 17 年度	第 23 回	15,628	4,067	26.0	3,269	435	13.3	20.9	10.7	1,642	211	12.9	171	8	4.7	42	4	3	5	9.5	50	1,376	208	15.1	80	6	7.5
平成 18 年度	第 24 回	14,318	3,855	26.9	2,834	379	13.4	19.8	9.8	1,486	211	14.2	105	10	9.5	20	2	2	3	10	20	1,173	151	12.9	70	5	7.1
平成 19 年度	第 25 回	13,587	3,605	26.5	2,401	337	14.0	17.7	9.3	1,237	175	14.1	91	5	5.5	24	0	4	0	0.0	0	1,033	156	15.1	40	1	2.5
過去 5 年間の平均		15,011.6	3,967.0	26.4	2,860.4	366.2	12.8	19.1	9.2	1,400	179.4	12.8	120.0	6.0	5.0	26.4	1.6	3.8	2.0	6.1	26.7	1,275.8	175.8	13.8	64.8	3.6	5.6

*卒業後に資格取得した学生の数は除く。在学中の資格取得者数に限る。

(2) 二次試験

表 6 によれば、この 5 年間ににおけるインテリアコーディネーター資格二次試験を受験した学生数の平均は年 390 人前後で推移している。そして、二次試験を合格した学生数の平均は年 220 人前後で推移している。そこで、二次試験を合格した学生の合格率の平均は約 55%前後で推移している。「学生」に属する受験者の二次試験合格率の平均は、1位の高校生で平均 70.0%、2位の短大生で平均 61.8%、3位の専門学校生で平均 59.9%、4位の大学生で平均 50.9%であった。そして本学住居学科の二次試験合格率の平均は 62.5%であった。二次試験を合格した者全体の合格率の平均が約 57%前後であるのに対して、二次試験を合格した学生の合格率の平均は約 55%前後とほぼ等しい。このことは、一次試験を突破した学生は、二次試験において要求される「論文」と「製図」の知識と技能を、一般社会人と同等に備えていることを示していると考えられる。また表 6 によれば、二次試験受験者全体に占める学生受験者の割合は約 7%前後で推移しているのに対して、二次試験合格者全体に占める学生合格者の割合も約 7%前後とほぼ等しい。これも上述の理由によるものと考えられる。しかしながら、二次試験合格者全体に占める学生合格者の割合が僅か約 7%であることは、このインテリアコーディネーター資格試験を学生である

期間に最終合格することが如何に困難であるかを物語っている。

表 6 インテリアコーディネーター資格二次試験 受験者数・合格者数

出典：(社) インテリア産業協会・共栄短大住居学科については独自調査結果

年 度	回	二次 全体				二次 学生 計				大学生				短大生				(内・共栄短大住居学科)(*)				専門校生			高校生		
		二次 受験者	内・一 次免除者	二次 合格者	合格 率%	二次 受験者	二次 合格者	計 合格者	性/全体 受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	受/合格	
平成 15 年度	第 21 回	5,679	2,031	3,203	56.4	335	164	49.0	5.9	5.1	121	52	43.0	3	2	66.7	1	1	100	50	207	108	52.2	4	2	50.0	
平成 16 年度	第 22 回	5,845	2,123	3,376	57.8	379	223	58.8	6.5	6.6	175	88	50.3	4	3	75.0	0	0	0	197	130	66.0	3	2	66.7		
平成 17 年度	第 23 回	5,631	2,016	3,169	56.3	449	246	54.8	8.0	7.8	220	110	50.0	8	5	62.5	3	1	33.3	20	215	127	59.1	6	4	66.7	
平成 18 年度	第 24 回	5,489	2,073	3,108	56.6	420	247	58.8	7.7	7.9	240	132	55.0	13	9	69.2	3	2	66.7	22	161	101	62.7	6	5	83.3	
平成 19 年度	第 25 回	5,255	2,000	2,995	57.0	367	205	55.9	7.0	6.8	198	104	52.5	6	2	33.3	1	1	100	50	162	98	60.5	1	1	100.0	
過去 5 年間の平均		5,579.8	2,048.6	3,170.2	56.8	390.0	217.0	55.6	7.0	6.8	190.8	97.2	50.9	6.8	4.2	61.8	1.6	1.0	62.5	23.8	188.4	112.8	59.9	4.0	2.8	70.0	

*卒業後に資格取得した学生の数は除く。在学中の資格取得者数に限る。

3) 本学住居学科の受験者・合格者（平成 15～19 年度：5 年間）

(1) 一次試験

表 5 によれば、この 5 年間における本学住居学科在学生のインテリアコーディネーター資格一次試験受験者数の平均は年 26.4 人であった。そして、住居学科在学生の一次試験の合格者数の平均は年 1.6 人であった。そこで、住居学科在学生で一次試験を合格した学生の合格率の平均は 6.1% であった。この値は、学生全体の一次試験合格率の平均が 12.8% であるのに比べるとかなり低い。しかし短大生だけに限って見ると、短大生全体の一次試験合格率の平均が 5.0% であるのに比べると、住居学科在学生の一次試験合格率 6.1% は若干高いことがわかる。しかも平成 15 年度は短大生の一次試験合格者 3 名のうち 2 名を本学住居学科の在学生在が占めた。同様に平成 17 年度も短大生の一次試験合格者 8 名のうち 4 名を本学住居学科の在学生在が占めた。この他、一次試験 2 科目の内 1 科目だけを合格して本学住居学科を卒業した学生も毎年数名ずついた。

それから図 3 によれば、一次試験の受験者数は年度によって差があったことが判る。平成 17 年度に受験生数ピークが見られたのは、1 年次からインテリアコーディネーター資格試験に挑戦するように、この年度から推奨を始めたからである。平成 18 年度及び 19 年度の受験生は、その殆どがインテリアコースの 1 年生であり、前年度の 1 年次に一次試験の 1 科目に合格しているか、1 年次に両科目不合格でも高得点を取った若干の 2 年生が含まれていた。このように 2 年次においてはインテリアコースの学生の資格取得に対する意欲が減退した。これらの 2 年次生の中には、インテリアと関係のない職種に就職が決まって、インテリアコーディネーター資格を取得する必要がなくなった学生も多少含まれていた。

しかし過去 5 年間、インテリアコーディネーター資格一次試験を受験した学生が年平均で 26.4 人おり、その大部分が 1 年次生であったことは、本学住居学科の定員が 50 名であることを考えると、この間インテリアの学びを志向して本学住居学科に入学した学生が大きな比重を占めていたことが判る。また今後も潜在的な需要があることを示唆してい

る。

また過去5年間、考えられる限りの対策を施した結果として、本学住居学科の一次試験の合格率が6.1%であったことは、他の短大と比較して若干良いとは言え、短大生としてインテリアコーディネーター資格を取得して卒業することは至難の技であることを示している。つまり一生懸命すべてのカリキュラムに取り組みながら、残念ながらこの資格を取得できずに失意の内に卒業した学生が多数いたことも忘れてはならない。

けれども、学生全体（四大・短大・専門学校・高校）の過去5年間の一次試験の合格率が12.8%であることから、過去5

年間に合格者を全く出していない学校も相当数あるのではないかと推測される。これに対して本学住居学科では5年間のうちに5名の最終合格者を出している。この点は一定の評価に値すると考える。

(2) 二次試験

表6によれば、この5年間における本学住居学科在学生のインテリアコーディネーター資格二次試験の受験者数の平均は年1.6人であった。そして、住居学科在学生の二次試験の合格者数の平均は年1人であった。そこで、住居学科在学生で二次試験を合格した学生の合格率の平均は62.5%であった。この値は、学生全体の二次試験合格率の平均が55.6%であるのに比べると若干良い。また短大生の二次試験合格者の23.8%、すなわち4人に1人は本学住居学科の在学生であった。

(3) 合格者の高校偏差値の検討

図4 a～cは平成15年度から19年度までの5年間における、二次試験合格者、一次試験合格者、一次試験1科目合格者に関する、本学入学時の高校偏差値を調査してまとめたものである。高校偏差値が開示されていない場合もあり、不詳部分が大きいので注意して分析しなければならないが、インテリアコーディネーター資格試験に合格するためには、

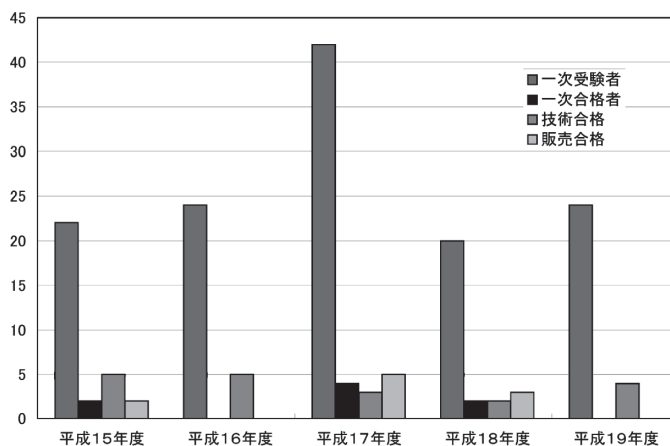


図3 共栄短大住居学科 インテリアコーディネーター資格一次試験結果

表7 便宜的な合格者数・合格率
(一次基本タイプ+二次専攻タイプ)

出典：(社) インテリア産業協会

年 度	回	全 体			学 生		
		一次基本+ 二次専攻受験者	二次合格者	合格率%	一次基本+ 二次専攻受験者	二次合格者	合格率%
平成15年度	第21回	15,831	3,203	20.2		164	
平成16年度	第22回	16,068	3,376	21.0		223	
平成17年度	第23回	15,342	3,169	20.7		246	
平成18年度	第24回	14,213	3,108	21.9		247	
平成19年度	第25回	13,751	2,995	21.8		205	
過去5年間の平均		15,041.0	3,170.2	21.1		217.0	

ある程度高い高校偏差値が必要であるという事実が存在する。特に一次試験は択一式の客観評価試験であり、合格基準点が偏差値によって決定されるので、学生本人に基礎学力が備わっていることが一次試験突破にとって重要となる。この調査結果からは、一次試験 2 科目を合格するためには、高校偏差値で 55 以上あることが必要であるという印象を受ける。昨今、大学は全入時代に突入したと言われているが、短期大学は既に何年も前から全入時代に突入していた。そのような状況の中で、高校偏差値の高い学生を集めることは困難であったが、インテリア分野の人気資格であるインテリアコーディネーター資格取得者が在学中に誕生したことで、この資格取得に意欲のある学生が毎年入学してくれてきたことは幸いであった。しかし前述の通り、実社会での経験のない学生、特に短大 1 年生にとっては、やはり難度の非常に高い挑戦であったことは否めない。表 5 によれば、四大生の方が一次試験の合格率が短大生の 2 倍以上ある。これは就職活動が始まる 3 年生までの 3 年間という挑戦期間があることその他、やはり基礎学力の高い学生が挑戦しているからではないかと思われる。また四大における充実した一般教養教育が当該資格試験合格のための幅広い知識を提供しているからではないかとも考えられる。

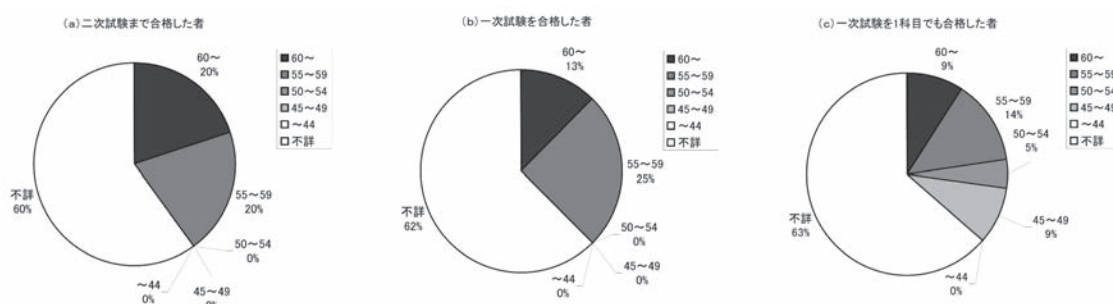


図 4 インテリアコーディネーター合格者と高校偏差値

IV その他の資格試験

1 色彩検定への取組みと結果及び評価

1) 色彩検定試験の概要

色彩検定という公的民間資格は、社団法人全国服飾教育者連合会（A・F・T）が主催する色に関する幅広い知識や技能を問う検定試験である。A・F・Tは1990年からこの検定試験を実施し、94年にはその内容が生涯学習の一環として評価され、95年度より文部科学省認定、2006年度からは同省後援の技能検定となった。受験者は2004年で累計70万人を超えた。受験者は幅広い年齢層に広がっているが、文部科学省後援の検定試験ということで高校、短大、大学、専門学校などの学生が非常に多いことが特徴の一つであ

る¹¹。色彩検定には、その難易度によって3級、2級、1級の三段階が設けられている。3級と2級は択一式の客観評価試験であり、合格基準点は約70%である。そして1級は一次試験が択一式の客観評価試験であるが、二次試験はカラーシートを切り貼りする実技試験がある。色彩検定では1級一次試験に合格し、二次試験に不合格になった場合、又は二次試験を欠席した場合は、その後2年間(2回)に限り一次試験が免除になり、二次試験の結果のみで合否が決定される。尚、3級と2級は夏と秋の2回の受験チャンスがあるが、1級は年1回しか実施されない。

色彩に関する資格試験には、この他に東京商工会議所主催のカラーコーディネーター検定試験¹²がある。A・F・T主催の色彩検定と東京商工会議所主催のカラーコーディネーター検定資格とを比較すると、カラーコーディネーター検定試験の方がインテリア等の色彩に関する知識や技能を問う問題が多いが、近年では色彩検定の試験範囲にもインテリア分野の問題が多少含まれるようになった。

2) 本学住居学科における色彩検定試験への取組み

本学住居学科では、このA・F・T主催の色彩検定に取り組んできた。そして1年次後期に3級、2年次前期に2級に合格することを目標にしてきた。そのための対策としては、1年次前期に正規の科目として「色彩学」を開講して3級の試験範囲の講義と若干の実技を実施してきた。そして1年次後期には外部の専門家を招いて4～6回程度、A・F・Tテキストに準拠した3級対策特別講座を開講した。同様に2年次前期にも外部講師による4～6回程度の2級対策特別講座を開講した。3級と2級は夏と秋の2回の受験機会があるので、不合格者については各自自習の上、次の機会に再チャレンジを奨励してきた。

3) 色彩検定試験の結果と評価

図5a～cは、色彩検定3級と2級の受験者と合格者の推移、及び3級と2級の合格率の推移を示している。まず3級の受験者数は年度によって大きく変化していることが判るが、3級の合格率は70～50%と高めで推移している。次に2級の受験者数も年度によって大きく変化していることが判る。そして2級の合格率は平成18年度を除き20%代と低めで推移している。各級の受験者数の増減からは、資格取得に熱心な学年とそうでない学年があるという印象を受ける。インテリアコーディネーター資格試験という難度の高い資格試験対策に費やすエネルギーは膨大であるので、その試験対策で燃え尽きてしまって、いわゆる「試験疲れ」という現象が現れたのではないかと考えられる。しかし合格率についてはある一定の範囲に収束されているという結果が出た。インテリアコーディネーター資格一次試験の「計画と技術」分野の試験問題には、色彩検定3級から2級程度の問題が毎年必ず出題されるので、インテリアコーディネーター資格一次試験対策としても色彩検定の試験範囲の学習は重要である。つまり試験範囲が重複している訳である。この点を正しく認識して前向きに取り組んだ学生は、たといインテリアコーディネーター資格一次

試験に不合格であっても、色彩検定2級には合格するという結果を残すことができた。

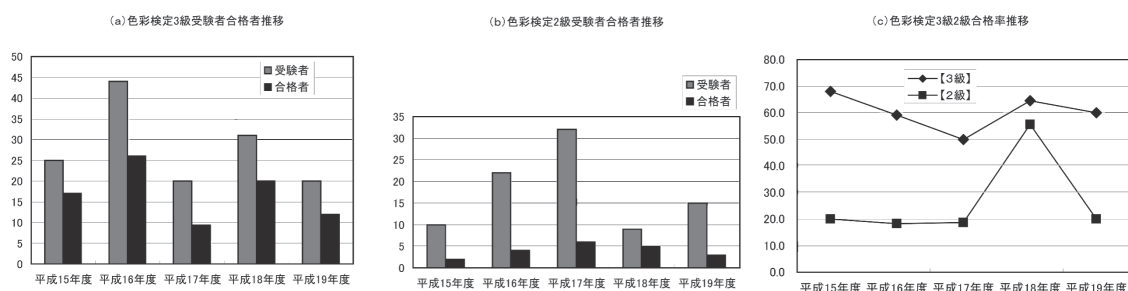


図5 色彩検定3級・2級受験生数・合格者数推移

2 リビングスタイリスト資格試験への取組みと結果及び評価

1) リビングスタイリスト資格試験の概要

リビングスタイリスト資格とは、NPO 法人日本ライフスタイル協会が認定する公的民間資格であり、平成17年度から始まった新しい資格試験である。インテリアコーディネーター資格試験は、建築とインテリアの計画と技術、商品と販売の全般に亘り、幅広く、尚且つある程度深い知識が必要である。また前述の通り、かなり難度の高い資格試験である。これに対して、リビングスタイリスト資格試験はインテリアの販売に特化している。その試験範囲は、インテリアの販売に必要な商品知識を問う「商品編」と、インテリアの販売に必要な流通知識及び接客知識を問う「販売編」の2本立てになっている¹³。実際のインテリアの流通と販売の現場では、インテリアコーディネーター資格試験の範囲になっている建築の詳細な知識と技術が必ずしも必要とされない場合もある。むしろ東京商工会議所主催の販売士検定試験3級程度の知識の方が重要である。したがって、このリビングスタイリスト資格試験では、「商品編」と同じく「販売編」を同等の比重で扱っている。つまり、リビングスタイリスト資格試験の試験範囲は、インテリアコーディネーター資格試験の「商品と販売」分野の内容に、販売士検定試験3級程度の「販売」に関する知識を加えたものといえる。リビングスタイリスト資格2級試験は、択一式問題に加えて若干の記述問題が出題される。合格基準点は約70%であり、受験資格は無く、年2回実施される。同1級も択一式問題に加えて若干の記述問題が出題される。合格基準点は約70%であり、受験資格は2級に合格していることだけである。この1級の受験機会は年1回しかない。

2) リビングスタイリスト資格試験への取組み

(1) リビングスタイリスト資格2級試験対策と結果

前述の通り、インテリアコーディネーター資格試験の「商品と販売」分野と、リビングスタイリスト資格試験は大部分が重複している。また難度もそれほど高くないことから、本学住居学科では特段の準備を実施しなかった。それにも関わらず、図6に示す通り、2級

の合格者は上昇を続け、平成19年度には単年度で20名を超えた。

(2) リビングスタイリスト資格1級試験対策と結果

ところが、リビングスタイリスト資格1級試験は、2級と比較して格段に内容が濃くなっている。2級は1級の受験資格を付与するためのものなので易しいが、1級は難しい。この1級試験は毎年2月に実施されるので、ちょうど年度の切り替わり時期と重なり、本学住居学科では毎年十分な対策を実施できなかった。学生側にも「資格試験疲れ」が見ら

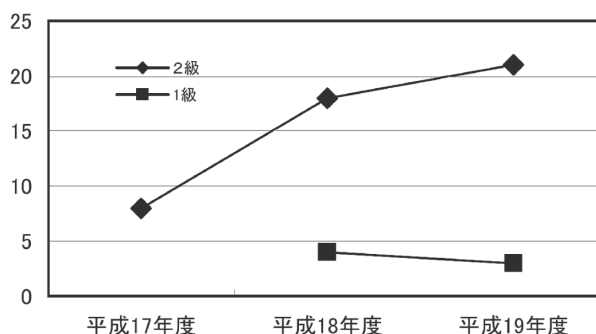


図6 リビングスタイリスト合格者数推移

れるので、無理やり対策講座を開講することは教育的に好ましくないとの判断も働いた。そこで、本学住居学科としては特段の対策講座を実施しなかったが、図6に示す通り、毎年4名程度の1級合格者を輩出できた。これはインテリアコーディネーター資格試験対策のおまけというべきものである。実際、インテリアコーディネーター資格一次試験には合格できなかったが、リビングスタイリスト資格1級試験に合格できたので履歴書に同資格を記載して就職活動に臨んだ学生がいた。

3 照明コンサルタント資格への取組みと結果及び評価

1) 照明コンサルタント資格の概要

照明コンサルタント資格とは、社団法人照明学会が認定する公的民間資格であり、主に「採光と照明」及び「照明器具」に関する基礎的な知識と、照明計画に関する基礎的な知識と技能を有し、照明に関するコンサルタントができることを証明する資格である。照明コンサルタント資格を取得するためには、検定試験というものを受験する必要はないが、1年間の通信教育「基礎講座」によってオリジナルテキストを学び、各单元に関する添削問題を毎回(計6回)期日までに提出し、各回とも60%以上取得することが必要である。60%未満の場合には再試験に合格する必要がある。そして最後にスクーリング1日を受講することによって資格認定証が発行されるという仕組みになっている¹⁴。

尚、照明コンサルタント資格の上位資格として照明士というものがある。この照明士資格の通信教育「専門講座」を受講する資格は、照明コンサルタントを取得していること、照明関連の実務経験があること、社団法人照明学会の会員であることである¹⁵。このルールに基づけば、実務経験があれば照明コンサルタント資格を取得した翌年でも「専門講座」を受講できる。しかし実務経験のない学生が照明士を目指すためには、まず照明コンサル

タント資格を取得してから、社会に出て照明関連の実務経験を積むという順序になる。

2) 照明コンサルタント資格への取組み

「採光と照明」に関してはインテリアコーディネーター資格試験の「計画と技術」分野の試験範囲になっている。また「照明器具」に関しても同試験の「商品と販売」分野の試験範囲になっている。この照明コンサルタントの通信教育は毎年8月から受講が開始するので、ちょうどインテリアコーディネーター資格一次試験前に照明に関する専門的な学びを開始することになる。そこでこの通信教育による講座を受講していれば、上述の「採光と照明」と「照明器具」に関する分野の対策にもなる。そこで毎年1年次から取り組むことを推奨してきた。そして毎年インテリアコーディネーター資格試験に挑戦する1年次生が積極的に受講してきた。しかし1年次から始めても、実際に照明コンサルタント資格認定証を手にするのは2年次の7月になるから、早い学生は既に就職活動を終えているので、この資格を就職活動に活用することは困難である。しかし建築やインテリアの仕事に進む上で、照明の「基礎講座」は役に立つ学びである。

V インテリア関連の資格取得支援を伴う教育方法のガイドライン

本研究の結果から導き出される「インテリア関連の資格取得支援を伴う教育方法のガイドライン」は、以下のようなものになると思われる。

- | | |
|--------------------|------------------|
| ① 明確なモチベーション | ④ 一人一人に向かい合う指導姿勢 |
| ② 基礎学力の向上と基礎教養の充実 | ⑤ 受講生の意欲の増進 |
| ③ 信頼度が高く効率的なカリキュラム | ⑥ 結果（合格・資格取得） |

まず学生自身の側に「必ず資格を取得する」という明確で強いモチベーションがある必要がある。しかしながらやはり基礎学力が低い学生は中々難度の高い資格を取得することはできない。そこで、基礎学力の向上及び学習習慣の確立のための取り組みが必須となるが、短大教育における基礎教養教育の充実も必要である。これらの専門的な資格試験には一般常識で答えられる問題もまま見られるからである。そして信頼度が高く、時間的に効率が良いカリキュラムを準備することも肝要である。特に初年度が大事となる短大生にとって、本試験の受験までの時間を有効に活用することは極めて重要である。そして、論文試験や製図試験など、実技指導や個別指導が重要となる資格試験の場合は、一人一人の学生に真摯に向き合うことが基本となる。このような指導を通して学生は成長をする。そしてこれらが相乗的な効果を発揮して、学生の意欲が増進して、合格という結果に結びつくと思う。

VI おわりに

平成15年度から19年度にかけて本学住居学科に在籍してインテリアの学びを志した学生に対する、インテリア関連の資格取得支援によって、多くの学生が在学中に希望する各種公的民間資格を取得することができた。特にこの間、インテリアコーディネーター資格試験という超難関の資格試験に合格して、在学中に学生インテリアコーディネーターになって卒業した学生を5名輩出できたことは大きな成果であった。そこには、学生本人の明確なモチベーション、信頼度が高く効率的なカリキュラム、一人一人に向かい合う指導姿勢が存在していた。しかしながら、難度の高い資格を取得できずに卒業した学生も大勢いたことも事実である。そこには、学生本人が培ってきた基礎学力の差という問題があった。この基礎学力は高校時代までに培うべきものであるが、昨今は入学時の学力不足問題もあることから、短大教育における専門教育と共に、幅広い基礎教養教育も重要である。

注および参考文献

- ¹ 太田さち、「インテリアコーディネーターの現状と短大教育に対する要望に関する研究：愛媛県松山市の場合」、『松山東雲短期大学研究論集』巻号25, 1994年12月, pp.185-192.
- ² 久保妙子、「短期大学における『住居・インテリアコース』の課題—二級建築士受験資格認定校として」、『家庭科教育』巻号78(8), 2004年8月, pp.30~34. 及び久保妙子、「短期大学で住居・インテリア分野を担当して」、『家庭科教育』巻号73(10), 1999年10月, pp.37~41. など.
- ³ 原田清、「各検定や試験に合格する力を培い、『住』のプロを志向してください。」、『共栄学園短期大学ガイドブック2005』, 2004, p.8.
- ⁴ 原田清、「住居やインテリアについての学びから、自分の未来の生活設計を身につけます。」、『共栄学園短期大学ガイドブック2006』, 2005, p.8.
- ⁵ 原田清、「柔軟なコース制を活用し、早い時期からあなたのめざす分野を深めてください。」、『共栄学園短期大学スクールガイド2007』, 2006, p.9.
- ⁶ 社団法人インテリア産業協会、『インテリアコーディネーターハンドブック販売編[改訂新版]』, 社団法人インテリア産業協会, 2006, p.2.
- ⁷ 壁装材料協会、『インテリアコーディネーター資格試験問題集』, 壁装材料協会, 1989, p.196.
- ⁸ 「一次先取りタイプ」で受験した場合の二次試験受験チャンスは3回。
- ⁹ 社団法人インテリア産業協会, インテリアコーディネーター受験のご案内, http://www.interior.or.jp/examination/ic_intro/index.html, 20081102 アクセス.
- ¹⁰ 加藤千晶, 「1年次でインテリアコーディネーター2次試験に合格!住居学科 加藤千晶さん」, 『共栄学園短期大学スクールガイド2007』, 2006, p.8.
- ¹¹ 色彩検定, 色の検定試験って?, http://www.aft.or.jp/what/what_01.htm, 20081102 アクセス.
- ¹² 東京商工会議所, カラーコーディネーター検定試験, <http://www.kentei.org/color/index.html>, 20081102 アクセス.
- ¹³ 特定非営利活動法人日本ライフスタイル協会, リビングスタイリストとは, <http://www.lifestyle.or.jp/ls/about.html>, 20081102 アクセス.
- ¹⁴ 社団法人照明学会, 基礎講座…照明コンサルタント, <http://www.ieij.or.jp/educate/>

kiso.html, 20081102 アクセス.

¹⁵ 社団法人照明学会, 専門講座…照明士, <http://www.ieij.or.jp/educate/senmon.html>, 20081102 アクセス.

謝辞

本研究の調査対象となった本学住居学科の教育現場における資格試験対策講座の企画運営においては、前学科長の原田清教授から多大なご指導とご協力を頂戴した。また原田清教授からは、本研究の方向性に関する幾多のご教示をいただいた。ここに深謝して御礼申し上げます。また各種資格試験の学内における実績調査及び整理に当たっては、本学住居学科助手の仲田幸江氏にお世話になった。仲田幸江氏には平成 19 年度の特別講座における販売編の講師も務めていただいた。またインテリアコーディネーター資格試験の過去問題の整理事務作業もしていただいた。ここに感謝して御礼申し上げます。それから、本務の傍ら本学住居学科において教鞭をとってくださった須藤諭氏、上田耕二氏、佐々木聡氏、河村容治氏、水野勢津子氏、柏原雪子氏、白井温紀氏、藤澤美恵子氏など多くの先生方からは、本学住居学科における資格取得支援体制についての温かいご理解と熱心なご協力を賜った。ここに心より感謝の意を表したい。また、平成 15 年度から 18 年度までのインテリアコーディネーター資格一次試験対策特別講座においては株式会社ハウジングエージェンシーの三島俊介社長をはじめ、研修事業部の村山雄一氏、出版事業部の遠藤秀一郎氏に大変お世話になった。ここに深謝して御礼申し上げます。そして、インテリアコーディネーター資格試験の実績調査において、公表されていない資料も含めて、快く内部資料をご提供してくださった社団法人インテリア産業協会各位に謹んで御礼申し上げます。また何よりも、本学住居学科インテリアルート／インテリアコースに平成 15 年度から 19 年度までの間に在籍して、インテリアコーディネーター資格試験と一緒に取り組み、その結果に一喜一憂した学生諸君にも感謝したい。本学住居学科は平成 20 年度末をもって閉科することになるが、ここで諸君が受けた教育の成果を実社会において大いに発揮されて活躍されることを願ってやまない。最後に、本研究は「平成 19 年度岡野研究奨励補助金」を頂戴した。このような教育と研究の機会を賜った共栄学園短期大学に謹んで感謝申し上げます。